

# ふるさと見て歩き

第13回

## 長倉の香具師



▲長倉天満宮境内にある「長倉香具商之碑」

お祭や催しものときに立ち並ぶ露店。普段は見ることのない色とりどりの商品に胸が浮き立ったことを思い出します。この露天商を古くは「香具師」とよんでいました。長倉にはその功績を記した石碑が残っています。

### ◆香具師とは

香具師はもともと「香具」つまり白檀や麝香などの香道具、あるいは薬品を売り歩く商人を指した、と言われて

います。戦国時代以降、日用品や食品も扱うようになり、江戸時代には露店、見世物興行などを行なう商業形態が一般的となったようです。碑文には、「十三香具八百八種」もの多様な品物を扱っていたと記されています。この表現は香具師の商売を言い表すときの決まり文句で、実際に八百八種のを扱っていたわけではなく、それほど多種多

様のものを扱ったという意味です。

現在よく目にする露店では単なる品物の売買が中心になっていますが、見世物興行や実演販売など、客を楽せませながら商売をするやり方が香具師の特徴的な手法で、特に「啖呵」とよばれる口上が往時の香具師の「売り」でした。独特な口調での説明や居合抜の話芸に聞き入っているうちに何となく買ってしまう、その日常にはない楽しさを求めてやってくる人が多かったのでしょうか。

江戸時代には香具師の扱う品物の多様さから、飴売りや、曲芸などの芸能者集団から利権をめぐるって訴えられることもあったようです。このような訴訟がきっかけとなって、江戸時代中期には香具師の扱う十三種について幕府から許可を受けています。それには居合抜、軽業、小間物売、覗見世物などがあげられています。

### ◆建碑の背景

江戸時代の後半から、長倉・野田・金井の三地区の香具商人が「天神講」という講（同業者の相互扶助および信仰の組織）を結成し、菅原道真を祀っていました。

長倉をはじめとする近隣十二カ村の総社がこの天満宮だったことから「天神講」と称したのででしょうか。年に一回の天神講の会合が八十八回開かれたという碑文の文言からすれば、天保六（一八三五）年頃に始まったこととなります。

この碑は、香具師の仲間の功績を記念して、長倉の香具師が中心となって大正十二年に建てたものです。石碑の裏面には建碑に関わった七十四名の氏名が刻まれています

が、そのうち十一名には「野口」「下伊勢畑」「茂木町」等の地名が記されており、彼らがその地の香具師であったと思われる。他の六十三名には地名が記されておらず、一部の人名から天満宮の氏子であった人々と推測できます。肩書きは記されていませんが長倉銀行頭取や医師、実業家の名前も見え、地元の顔役的な人物が関わっていたようです。また女性とわかる名前も七名入っています。しかし、どのようにしてこれらの人物を募ったのか、詳しい経緯は現在では分からなくなっています。

現在、祭礼や縁日の夜店を支えて

いるのは「露店屋」と呼ばれる人々です。地域ごとにある街商組合に所属し、出店の際はその地の世話人に申し込むという手続きを踏みます。四十年ほど前には市内にもたくさん露店屋が存在していましたが、現在では二、三人になってしまったといえます。主として寺社の縁日や門前市に出店する「高市」（タカマチ）が業の場で、当時はどの寺社も定期的に市の日があり、連日どこかしらに露店が出ていて、多いときは二ヶ月連続で営業することもあったそうです。祭りの日が週末に集中してしまいう現在よりも香具師の活躍の場は大きかったに違いありません。

（歴史民俗資料館）



▲天満宮境内、右手前に建つのがその碑